3 | 宇部におけるセメント産業

宇部パーライトの袋
（「宇部興産株式会社 宇部パーライト」より転載。発行年不明/1970年前後）

宇部セメント製造（株）の存在は、宇部のまちづくりと密接に関わっています。宇部発展の功労者として知られている渡辺祐策は、「掘りつくす運命にある石炭からいずれ無限の工業に移行する」との理念に基づき工業用地の造成などに力を注ぎました。

ここでいう「無限の工業」のひとつが、セメント業であったと言えます。その見通しのとおり、炭鉱は閉山したものの、現在までセメント業は続いています。

宇部セメント製造（株）は戦時下の1942（昭和17）年に、宇部での事業を安定して維持存続させるため、沖ノ山炭鉱、宇部窒素工場、宇部鉄工所と合併し、宇部興産を新発足させます。

戦後は朝鮮戦争を起点としたセメントの需要拡大もあり、1950（昭和25）年に、宇部興産宇部セメント工場は、単一の国内セメント工場として、生産量国内一位を記録しています。

一方、当時石炭の焼成により発生した灰によって、市街地では洗濯物を汚し窓も開けられない状態が続き、ばいじん汚染が市民生活と健康への影響に大きな問題となってきました。その対策として1956（昭和31）年には、集じん装置で集めた灰を利用してセメントの凝結力や耐水性を上昇させた「宇部ポゾランセメント」が開発されました。このセメントは、のちにダムや海底の工事で威力を発揮しました。

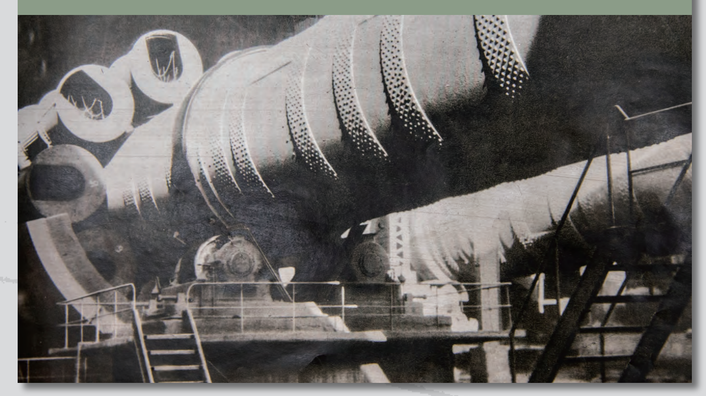
朝倉文夫
《渡辺祐策翁像》1936年
渡辺は1897（明治30）年に、宇部興産の前身となる沖ノ山炭鉱を創業しました。宇部市文化会館前に設置されています。

少し話はそれますが、宇部に残るセメントで制作された野外彫刻の主な制作時期は、1950年代後半から1960年代で、高度経済成長期にもあたり、セメントの需要が急増し、広く社会に普及した時期です。

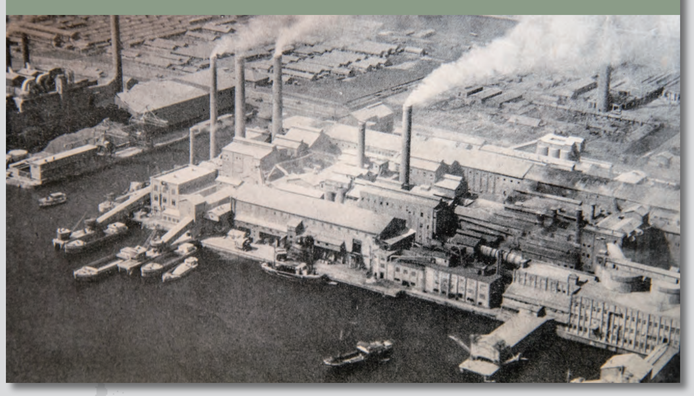
社会のインフラなどを作るセメントが、人々の心も癒し、安らぎを与える作品になる様子を見て、当時の人々は一層セメントに親しみ、宇部で生産していることを誇りに思ったのではないかと想像できます。

荻原守衛《坑夫》1907年
荻原がパリ滞在中に制作した作品。1907年当時、産業革命が一足早かったヨーロッパでは、日本以上に坑夫が多くいたのかもしれません。石炭記念館の近くに設置されています。

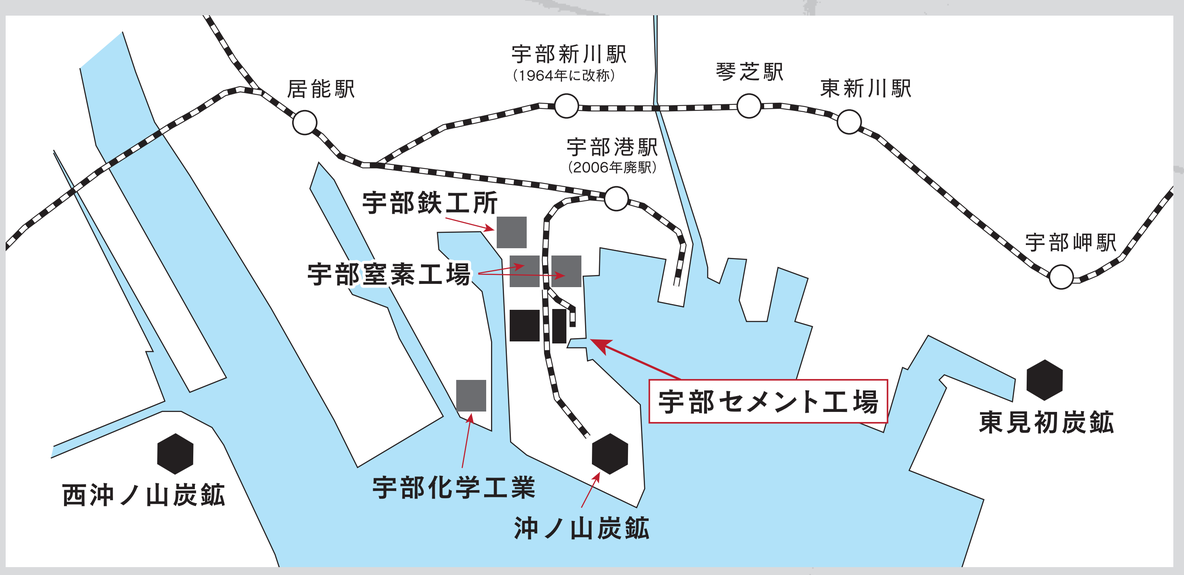
セメントを作る時に使用する巨大な回転窯
-「宇部興産株式会社 事業概要1951」より転載



宇部セメント工場全景
-「宇部興産株式会社 事業概要1958」より転載



宇部セメント伊佐工場
-「宇部興産株式会社 宇部セメント 1960」より転載



1960年代の宇部セメント工場周辺の簡略地図

石炭を運ぶための線路が海に並行して伸びながら、工業地帯を貫いている。
合理的に石炭を運び、活用できる立地が整えられていたことがわかる。
また、海上輸送のために、細長い埠頭を形成し、窪みを設け、
船への積み込みなどがしやすい作りになっていることがわかる。

※本地図は1969年の地図を元に作成している。
1967年にはすべての炭鉱が閉山を迎えているが、位置関係を把握するために記載した。
また、複数ある貨物用の支線などは見やすさを優先して省略した。
現在に至るまでに埋め立て地が少しずつ増えるため、海との境界線は現在とは異なっている。